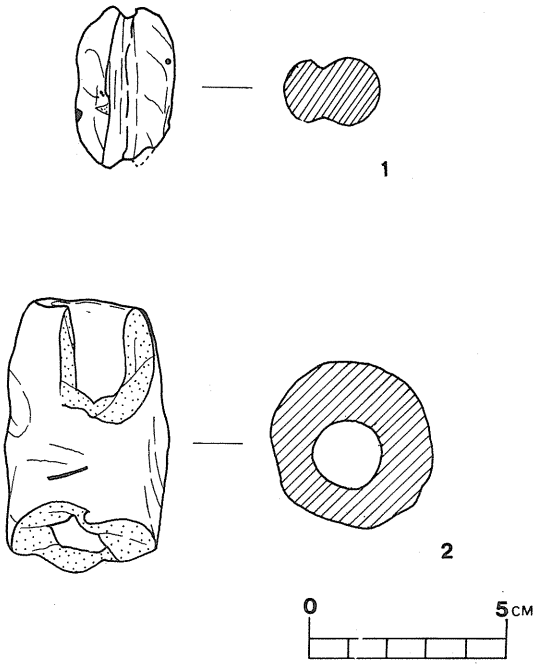
11. 土錘について （第35図）

1は，棒状工具によると思われる溝が，長軸を一周する有溝土錘である。赤褐色を呈し，石英・小砂礫を混入し，整形は雑である。重量は，18.8gを量り，焼成は良好である。 アラヤ遺跡（5171）出土の土錘である。

2は，径3～4.2cm，現残存長さ7cmほどの管状土錘である。貫通孔径は1.6～2cmで，色調は灰褐色を呈し，焼成は良好である。重量は104.1gを有する。土師質で，古墳もしくは歴史時代のものと思われる。堂地内遺跡（5273）採集の土錘である。

（森山 峰子）



第35図 土錘実測図

12. 石器について （第36図，第37図）

1は短冊型，2は自然面を利用した分銅型の，また，3は剝離の角度がゆるい，打製石斧である。4・5・7は礫器である。4は，石の自然な形を生かして刃部を鋭利にしてあり，5・7には比較的大きな剝離がみられ，特に7は入念に施されている。6の表面中央には径2.5cm，深さ1.0cmの凹みを有し，裏面にも施行のあとがみられる。8の表面には2カ所の，裏面には1カ所の凹みがみられる。9．10は緑泥片岩製の砥石であり，9は3面が，10は片面のみが使用されている。

また，アラヤ遺跡より石鏃7点，渡里遺跡より石鏃1点，サイドスクレーパー1点が追加採集されている。

（宮野 久恵）